

*この作品は、長崎喫茶おやじの会主催「コーヒーにまつわる作品」(平成19年10月1日)優秀賞受賞作を訂正・大幅に加筆したものです。

続

珈琲の思い出

鈴木優子

48

来た道と同じカーブを下るたびに、美しい宝石のような夜景が木立の間からチラチラと見える。と、和樹が右手でハンドルを握ったまま左手で優子の右手を取ると、自分の唇に優子の手の甲を押し当ててきた。

「和樹さん……」

「優子、ああ、大好きだよ。ずっとこうしていたい。」

和樹が切なそうにそうつぶやくと、優子も

「私もよ、和樹さん。本当は帰りたくなかないの。」

と答えた。

すると、和樹が今度は優子の指を自分の口の中に入れて一本ずつ丁寧に舐め始めた。

「あ……」思わず感じてしまった優子が声を上げると、

和樹は「うーん……」と唸って、眉間に皺を寄せて運転し始めた。

「和樹さん、ねえ、あのね。私、K町の交差点のところまで送ってもらってもいいかな？」

「ん？あ、ごめんごめん。優子いいよ。もちろん。ホントごめんね、遅くなつて。」

「なんかね、主人がもう帰ってきたみたいで、母はもう家に帰ります、っていうメールが来てた。」

「ああ、ごめん！急ぐね！」

「あ、でも安全運転をお願いします。」

「もちろん！大事な優子に乗せてるんだから。危ない目になんか絶対に合わせないよー！」

(続く)